

【論文】

女性の災害経験を記録する活動の意義 —アンケートや聞き取りによる記録活動を中心に—

堀 久美 (岩手大学男女共同参画推進室)

はじめに

自然災害が起きた際、被災から復興過程において、性別によって異なる問題が生じる。しかし女性の災害経験は、公的な記録には残りにくく、それゆえに、女性たちは自らの手で記録を残し、その経験を活かそうと取り組んできた。

それでは、女性たちはどのようにして記録を残してきたのだろうか。記録とは、将来のために物事を書きしるしておくことや、またその書いたものを意味する。女性が残した記録誌には、経験者自身や支援者等が執筆した原稿を集めた寄稿集の他、アンケートや聞き取りによる報告書がある。これらの報告書は、女性たちの災害経験を記録として残すのにどのような意味をもっているのだろうか。本稿は、災害時や復興過程における女性の経験を記録に残す活動に取り組む女性へのインタビュー調査や参与観察の結果を踏まえ、アンケートや聞き取りの手法を用いて記録を残してきた女性の活動の意義を検討することを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。第1章で、先行研究から、女性の災害経験を記録する取組について検討し、第2章で、女性の災害経験についての記録誌から、その手法等を概観する。そのうえで第3章では、独自のインタビュー調査や参与観察結果から、アンケートや聞き取りという手法について検討し、最後に、これらの活動の意義を考察してまとめとする。

1. 女性の災害経験の記録についての先行研究

災害の社会学的研究が本格的に発展するのは第二次世界大戦後だが、1990年代には、ジェンダーの視点からの研究も始まり、被災から復興過程において、ジェンダーによって異なる問題が生じることが明らかとなった(池田 2010: 4-5)。しかし日本では、このような知見に基づく施策の展開は遅れ、その不備を女性団体等の支援が補ってきた。東日本大震災後には、女性団体や男女共同参画関連施設の果たした役割についての研究が行われ、それらの活動が被災した女性への支援に大きな役割を果たしたこと、その一方で、災害時にジェンダ一格差が一層顕在化するため平常時からの格差解消やすべての支援者へのジェンダー視点の浸透が課題であること等が指摘されている。また、関東大震災や阪神・淡路大震災においても、女性団体等が被災者支援に力を発揮していたことが明らかとなっている(池田 2012、辻 2016 等)。

一方、災害復興における記録を残すことの重要性については、とくに阪神・淡路大震災以降議論が進み、国立国会図書館に東日本大震災に係る電子アーカイブ「ひなぎく」が開設されたことにも象徴されるように、その意義は評価を得ている。阪神・淡路大震災をはじめとする災害時の女性の経験についての記録があり、それを支援者たちが学んでいたからこそ、それ以降の災害時に女性団体や関係施設が被災した女性支援に力を発揮できたとの評価もある(浅野 2012: 9 他)。しかしながら、ジェンダー視点をもって災害記録の実態やその意

義を検討する研究は乏しく、殊に、その手法について論じた研究は見当たらない。筆者もこれまで、女性の災害経験を記録する活動をテーマに研究を進めてきたが(堀 2015、堀 2016、木下・堀 2017)、記録の防災政策への活用状況に焦点を当てて論じることが多く、記録を残す際の手法という観点からの検討は行っていない。

“Collection Development on Women’s Earthquake Disaster Experiences and Support Activities in Japan.” (Aoki2018) は、ジェンダー視点から記録活動を論じた数少ない先行研究である。ここでは、女性の震災経験と支援活動の記録収集の必要性を提起し、アーカイブシステムの状況や、女性団体による5つの取組事例を紹介する。事例の第1は、調査報告書発行や「伝えるカフェ」に取り組む団体である。アンケートによって1512人もの経験を記録したことや、災害後一定の時間が経過した後によく語られた経験を記録したことへの評価が示される。また写真を通じてメッセージ(声)を作成するフォトボイスや、被災地や災害の記憶をフリー刺繍で表現した取組も紹介する。セクシュアルマイノリティの当事者団体や政策提言等を行う団体の発信についても紹介をし、記録活動の多様性が示される(Aoki2018: 14-18)。しかしこの研究の目的は、情報分野の専門家の立場から記録収集について提言することであるため、取組の詳細は論じられていない。さまざまな女性の災害経験を記録するための取組方やその意義を明らかにするには更なる検討が必要である。

2. 女性たちが残した記録誌の概要について

被災地の女性団体や被災した女性自身が体験記や調査によって災害・復興時の課題を記録する取組が増えたのは、阪神・淡路大震災からと言われている。実際にはそれ以前の記録も残っているのだが、阪神・淡路大震災では、記録誌の数も増え、その発信力も強まった。記録活動の活発化には、女性センター等が取り組んでいた女性の発信力向上支援の成果やワープロ、パソコン等の文書作成機器の進歩といった要因がある(堀 2018b: 5-6)。それ以降、中越大震災¹や東日本大震災等でも、女性の震災経験についての記録活動が行われている。中越大震災後の記録活動では、自発的な活動は女性に多く見られたとの指摘があるように(松井 2011: 73)、女性団体等の活動によって発行された記録誌は、自主的な取組であり、「灰色文献」と呼ばれる、一般の出版流通ルートを通さない発行物が多く含まれている(木下・堀 2017: 40)。

女性団体による災害時の記録の嚆矢として取り上げられることの多い『女たちが語る阪神・淡路大震災』には、「マスメディアが流した美しい『家族幻想』からこぼれ落ちた女性たちの思いを拾い集めて」(ウィメンズネット・こうべ 1996: 231)、「一握りの女性たちの声ではあるが・・・これからの女性たちの暮らしを変える力になれば」(同: 3)との記載がある。中越大震災でも、「お役所の記録」やマスコミでは残らない女性の経験を残すため、また明日へと繋がる冊子を残す「被災地責任」を果たすため、記録活動に取り組んだ女性たちがいた(堀 2016: 13、14)。東日本大震災後の女性の発信の検討からも、「個々の体験や気持ちが伝えられていない、だから自分たちで記録を残すのだという思いと、この残した記録を今後の災害時に活かしてほしいとの思い」があることがわかる(木下・堀 2017: 41)。女性の災害経験を可視化し、活かしていくには、自らの手で記録誌を発行しなければならない、という共通する動機が、多くの灰色文献を生み出した。そして、古く新潟地震の記録誌

が、「一つ一つの陰には、たくさんの似かよった話があった」（新潟県婦人連盟他 1965：10）と記したように、女性の個人的な経験の背景に社会的な課題があるとの思いが、さまざまな立場にある女性それぞれの経験を記録に残してきた。

それでは、女性の災害経験の可視化のために発行された記録誌は、どのようにして経験を集めているのだろうか。これまでに筆者が収集した女性の災害経験（支援活動を含む）を記録するために自主的に発行された記録誌 95 点（災害を想定した調査報告、防災マニュアル、研修教材、資料集、提言のみの冊子等は除く）は、1964 年の新潟地震後から 2016 年の熊本地震や 2017 年の九州北部豪雨災害までに渡り、東日本大震災関連が最多の 55 点となっている。東日本大震災関連が最多なのは、そもそも発行数が多いこと（Aoki2018：13）が大きな要因だが、筆者が東日本大震災後に被災県である岩手県を拠点として研究を開始したことも影響しているだろう。作成・発行は、約 3 分の 2 を女性団体が占める²。東日本大震災関連では、24 点が被災地外に拠点をもつ団体や関連施設が作成・発行の中心となっている（広域避難者による 2 点を含む）。これは他の災害では見られない。記録誌は、発行団体等から直接入手した他、兵庫県立男女共同参画センターのオープン震災ライブラリーや国立女性教育会館女性教育情報センター等の専門図書館の所蔵資料を複写（抜粋を含む）した。また Web からダウンロードした例もある。

<表 1 記録誌の作成・発行主体>

	女性団体	個人（女性）	関連施設	その他団体	計
阪神・淡路大震災	19	0	4	0	23
中越大震災	7	1	0	2	10
東日本大震災	38	1	8	8	55
その他の災害	3	0	2	2	7
計	67	2	15	12	95

その他の災害の内訳は、新潟地震 1、長野県西部地震 1、宮城県北部連続地震、岩手・宮城内陸地震 1、熊本地震 3、九州北部豪雨災害 1 である。

作成・発行主体のうち、女性団体とは、女性の地位向上やジェンダー格差解消を目的に活動する組織で、メンバーに男性が含まれている場合もある。関連施設とは、女性センター等男女共同参画推進関連施設や、施設を運営する財団、法人を指す。その他団体の内訳は、被災者支援団体 5、子育て支援団体 2、外国人支援団体 1、母子支援団体 1、セクシュアルマイノリティ当事者団体 1、イベント実行委員会 1、防火協会 1 となっている。

<表 2 記録誌が用いた手法>（複数の手法を用いる記録誌があるため合計は 95 を上回る）

	寄稿	アンケート報告	聞き取り報告	事例	イベント記録	①	②	提言	③
阪神・淡路大震災	11	6	2	0	2	1	5	0	0
中越大震災	4	3	0	0	5	0	0	0	0
東日本大震災	10	8	14	2	12	7	4	7（注）	3
その他の災害	2	2	2	0	0	2	0	1	0
計	27	19	18	2	19	10	9	8	3

① 活動（事業）報告、②団体報告、③その他（写真とメッセージ2、放射線試験結果報告1）

（注）提言7のうち、4件は同一提言の掲載

記録を残す手法では、寄稿が27点と最多で、災害関係のシンポジウム等のイベント報告書とアンケート報告が19点、聞き取り報告が18点を占める（複数集計）。いずれの災害でも、複数の記録誌を発行する団体が含まれるが、東日本大震災関連では継続してアンケートや聞き取りを実施し、報告書を発行した団体がある。フラッシュバックによって、直後には経験を語れなかった例も耳にしており、継続的なアンケートや聞き取りは、復興過程における経験を記録するだけでなく、一定の時間を経てやっと語れるようになった災害時の経験や思いを記録する役割を果たす。

ところで、聞き取りという手法は、近現代女性史において「みずからの体験や観察を文字化する機会の、相対的に少なかった女性を、歴史の主人公の位置へと牽きだすのに、大きな役割を果たした」と指摘される（鹿野1989:52）。東日本大震災後には、被災地で、性別を問わず住民の経験や思いを聞き取り、発行する取組が行われ、被災者の生の声を後世に残す取組が、被災者を元気づけ、経験の風化を防ぐと捉えられている。女性たちの聞き取りにおいても、高齢者や外国人等、自らの経験の文字化が容易でない女性を対象とする例がある。加えて、経験の文字化へのハードルが、災害によって、心理的にも、時間的にも一層高くなったと推察される女性たちの経験が、聞き取りによって記録されている。

一方、アンケート報告では、社会調査の報告で見られるような選択肢への回答結果を集計して記載する報告書が多い。しかし回答結果を集計していても、量的調査としては規模の小さい例が多い。規模が大きい場合も、集計に加え、自由記述をすべて掲載する報告書もある。記述の項目を統一するためにアンケート形式にしている場合もあり、回答者の記述がそのまま掲載されて記録誌となっている。以上のことから、アンケートが量的にデータを収集するためだけに用いられているわけではない状況が伺える。

アンケートや聞き取りを実施した団体には研究者が加わっている、あるいは研究者の助言等を得ている例も少なくないが、アンケートや聞き取りの手法が、いわゆる学術調査とはニュアンスの異なる意味合いももっていたのではないかと考えられる。女性たちは、記録の際に、アンケートや聞き取りという手法を用いたことをどのように捉えているのだろうか。独自インタビュー調査や参与観察の結果を踏まえ検討していく。

3. 担い手のアンケートや聞き取りについての捉え方

この章では、活動に携わる女性への独自のインタビュー調査や参与観察の結果から、アンケートや聞き取りによって災害経験を記録に残した担い手の動機や成果の捉え方をみていく。筆者は2014年から災害に関わる活動に取り組む女性たちに、活動の実態や自身の活動の意義や成果の捉え方、政策への反映状況等を尋ねる半構造化インタビュー調査を実施している。本稿では、その中から、記録活動に携わり、アンケートや聞き取りに関連する発言のあった協力者を取り上げた。Aさんは、発行団体3名へのグループインタビューとして、それ以外は調査者との1対1で実施した。Aさん、Bさん、Cさん、Dさん（初回）、Hさんは、インタビュー調査時が初対面であった。

＜表3 インタビュー調査の概要＞

	関連する災害	記録に関わる活動内容	調査時期等
A	長野県西部地震	寄稿集（一部、聞き取り）（1985年）	2015年2月
B	阪神・淡路大震災	聞き取り報告書（1996年）	2017年11月
C	中越大震災	アンケート報告書（2005年）	2016年2月
D	東日本大震災	アンケート報告書（2011年）聞き書き報告書（2012、2015、2016年）他	2015年9月 2018年6月
E	東日本大震災	アンケート報告書（2012、2015年）	2014年8月 2016年5月
F	東日本大震災	同上	2016年4月
G	東日本大震災	同上	2018年11月
H	熊本地震	聞き取り報告書（2017年）	2017年10月

Dさんは、東日本大震災以前にも女性と災害に関する調査を実施し、提言をまとめた実績があり、「なるべく記憶の新しい内に、この調査をしておかなければいけない」との思いから、発災から6ヵ月後にアンケート調査を実施した。調査は、「数字があることによってより説得力を増す」との狙いをもって、量的にも十分な1500を超える回答数が確保されている。一方で、「実際の場面が本当に浮かぶくらいの言葉が必要」と、「選択よりは自由記述」によって回答する設問も多い。しかも、報告書には、「10件も同じ文章があるから、1件にまとめようというわけにはいかなくて、10人の声としてやっぱりちゃんと掲載したかった」との考えから、数的にも量的にもボリュームのある自由記述をすべて掲載する³。この自由記述について、報告書を読んだEさんは、「同じような記述が繰り返され、迫ってくる、苦しくて読み通せない」と述べ、自由記述に先立つ選択による設問に提示された選択肢が文章となっており、それがきっかけとなって、回答者が自分の経験や思いを記述する言葉を引き出したのだろうと考えている⁴。Dさんの団体では、アンケート結果を踏まえて提言をまとめ発信しており、それを「声なき声を集約」した提言と表現する（イコールネット仙台2012：112）。また、2013年以降は、聞き取った経験をまとめた報告書を3冊発行しており、「言葉の重み」を大切にする記録活動を継続している。

Eさんは、活動を通して「記録が不足」「体験談集や感想文集より少しふみ込んで、ジェンダー平等の視点から女性の経験を記録に残したい」との考えから、震災の翌年にアンケートを実施した（エンパワーメント11 わて 2013：1）。この動機についてインタビューでさらに詳しく尋ねたところ、Aさんは、他の女性団体の寄稿集を読んで「ありがたかった」ことは書かれていても「大変だった」ことが書かれておらず、「大変だった」と書いていても本音が読み取れなかったことをあげる。被災した女性たちが、その経験を表現することの難しさは、Dさんも「こんなことで辛いとか、なかなか言葉にならない」「私よりもっと大変な経験をした人がたくさんいるので、私は大丈夫、という言葉の方が多い」ため、「聞き取る」のではなく「汲み取る」必要があったと述べる。Eさんはまた、行政が調査をしても、女性がいかに大変だったかをきちんと残すアンケートはしないだろうと考えたことも理由とする。さらに「被災した沿岸部の女性たちは、まず自分が生きて、生き延びた人たちのお

世話をするだけで精一杯なので（記録する余裕はない）、それならば、被災地の女性である自分たちが「アンケートならできそうだな」と考え、実施したと言う。

これらのことから、原稿を集めるだけでは記録に残りにくく、「声なき声」となりがちな女性の災害経験を記録に残そうと、アンケートや聞き取りが実施されたことがわかる。また、DさんもEさんもジェンダー平等をテーマとする活動に取り組んでおり、その視点から、女性ゆえの困難な経験についての記録の不足を補おうとしたことも伺える。

一方で、被災地では災害後に多くの調査が実施され、被災者の「回答疲れ」が指摘される。中越大地震後にアンケートを実施したCさんは、グループ内で回答者への負担が議論されたと言う。その批判に対し「何度も何度も質問事項を練り直して、答えやすいように、なるべく負担のないような形」を検討した。それが功を奏したのか、回答者は「非常に正直にいろんなこと書いてくださった」と言う。Eさん、Fさんたちの団体では、報告書を携えて現地報告会を開いたが⁵、その理由をFさんは、実施前に「回答してもらって終わりでは搾取なので、せめて返そう」と話し合っていたからだと言う。この報告会では「もっと調査票があれば、回答させてあげたい女性がいた」という参加者からの発言があり、Eさんからも調査票が届かなかった地域の女性から「このような経験を尋ねられたことはなく、次回は調査票を届けてほしい」との連絡があったことが紹介された。これらの反応は、女性の災害経験や思いに焦点を当てた調査に回答すること、回答を通じて自身の経験や思いが表現できることに意味を感じる女性がいることを示す。もちろん好意的な反応だけでなく、回答者から「かなり反発」を示される設問もあったとのことで、報告会でも攻撃的とも感じられる発言も聞かれた。それでも、回答がどのように活かされるのが実感できないことが「回答疲れ」の背景にあるとすれば、Eさんたちのように報告会を開催する信頼関係が、回答への積極的な姿勢や反発さえも伝える交流をもたらしたと推察される。

回答者や協力者との関係の近さを感じさせる担い手の思いは、意義について尋ねた際にも表れた。アンケートの意義について、Gさんは、実施者が「言っただけなのか」と逡巡しつつも、「書く側、アンケートに答えた側にとっては、良かった」と捉えている。それは、自身の義務としてある報告原稿を書くことでその経験が整理された実体験から、「書く、振り返りをする作業が大事」だと実感しており、きっかけがなければ「書く」ことのない日常のなかで、アンケートが「被災した方々が自分の気持ちを見える化する」「言葉にできたこと」のきっかけとなったと考えるからだ。Gさんの捉え方を裏付けるように、Dさんからは、アンケートに回答したという女性が、開架している報告書を読んで、「自分の名前は無いけれど、ここに協力したことで自分の体験というのがここにまとめられている、次に伝えることの重要性を今感じているので、とてもありがたい」「大変な経験を自分はしたので、それを乗り越えられた自分というのもう一度見つめなおせる」と話して行ったというエピソードが述べられた。

聞き取りでは、さらに協力者との距離が近く、協力者の直接的な反応についての話があった。Bさんは「聞いてくれてありがとう」「書いてくれてありがとう」という人が多かったと言い、協力者は「心の中には後悔や怒りや悔しさなど（女性問題に集約される）意識を持っていて、それを閉じ込めて折り合いをつけていた」「聞き取りが意識づけたのではなく、閉じ込めていた違和感を自分で表出させて話してくれた」と捉えている。また、被災者の状況を知ることと、その状況によっては支援に繋げることを目的に聞き取りを実施したHさ

んは、取組実績を踏まえて市に伝えた意見に返信があり、施策に影響を与えていることに手ごたえを感じている。しかし、Hさんが熱心に話してくれたのは、聞き取りへの協力をきっかけにその報告会で経験を語った女性についてであった。その様子を、生き生きした顔になったと述べ、「話すことで自分の良さ、強さ、誇りを感じられたんじゃないのか」と捉えており、協力者の変化が「凄くうれしかった」と述べる。

以上のことから、アンケートや聞き取りは、きっかけがなければ、自身の経験や思いを言語化することがなかったであろう女性の経験を記録し、社会的に発信するという意義と併せ、回答者や協力者にとって自己表現の機会となる意義ももっていたと言える。

ところで、Eさんは、自身が実施したアンケートの報告書作成において、無回答の意味や自由記述における主語のない記載に着目した（高橋 2013：15-18）。ブルデューは、無回答を隠してしまおうとする世論調査を批判し「最も重要な情報は、無回答の率の中に眠っている」「無回答率とは、一つのカテゴリーに特徴的な回答を算出する確率を計る尺度」と指摘した（ブルデュー1987=1991：298）。Eさんの着目は、無回答となった設問に対する回答女性の「声なき声」に心を寄せる姿勢を示す。Eさんは、報告書作成を通じて、自身を含め「岩手県にいたすべての女性が被災したこと」と感じたと言う。そして主語のない記載についても、自身も主語のない回答となったことを振り返り、「ケアする側の女性は、自分のことだけでは幸せになれない」「いいとか悪いとかはまた別。そうやって生きてきた人にとっては、なかなか私だけで良いとはならない」ことがわかったと捉えている。

聞き取りでは聞き手も程度の差はあれ、災害の影響を受けている。Aさんは、「女どうしだから、一緒になって、泣いて話したこととかあるから」自然の声を聞けたと言う。Dさんたちの聞き取り報告書でも、「直接の被災がなくても、被災者である自分を感じながら、その立ち位置に戸惑うことがあった」（イコールネット仙台 2013：177）と記されており、インタビューでは、様々なライフスタイルの話し手が個人的な経験として話されるので、聞き手は「その方の個人的体験として受け止めていく」、「ところがその背景には、やはり聞いている側にも共感できる部分が見えてくる」、「同じような災害を経験したら、きっとこんな風に行動するだろうとか、こんな風な辛さを経験するだろうな」と、「共感とそこに自分も重ねて考える振り返り」があったと言う。このように相手に心を寄せ、自身の当事者性を感じながらの活動が、声をあげることが難しかった回答者や聞き取りの協力者の経験を記録に残すことを可能にしたと考えられる。

アンケートや聞き取りは、自身の経験や思いを原稿にすることが難しい状況にある女性に、自身の経験を振り返り、言語化を促すきっかけとなり、実施者の共感や当事者性に基づく回答の読み取りや聞き取りが、このような手法が用いられなければ埋もれてしまった女性の災害経験を記録に残すことを可能にした。次章では、さらに取組の意義を検討する。

4. まとめ アンケートや聞き取りによる記録活動の意義

東日本大震災では、女性たちがその困難な状況に対し声をあげられなかったことが指摘された。スピヴァクが「サバルタンは語るができない」ということで意味していたのは、語ることに聞くことが一対になり、初めて言語行為は完成するもので、サバルタンは死を賭して語ろうとするときですら、聞いてもらうことができないということである（スピヴァク 1999：85）。こうした議論を踏まえ、筆者はかつて、震災後に女性が声を上げることの困難

さの背景に、そもそも震災前からの、自らの声が聞かれ、応答を得るといった経験の少なさ、たとえ「語ろう」としてもその声が聞かれないことで、言語行為が完成していなかったことを原因の一つとして推察した(堀 2018a : 159)。そして、被災した女性の声を聞き、応答を与えた震災後の物資支援の活動が、被災した女性にとって、「声をあげる」ことの大切さに気づききっかけとなり、エンパワーメントの支えになったと論じた(同 : 160)。被災地の女性たちが、聞かれることがなかったために、震災時に「声をあげる」力を発揮できなかったとすると、災害経験の記録誌への寄稿とその発行、保存は、自らの声が聞かれ得るものであるという新たな経験になるだろう。

しかし、経験を表現することは容易ではない。自己表現活動は、自分やとりまく状況を相対化して認識し、それを他者と共有し、社会的な文脈に位置づけるのに有効であり、女性の主体形成をめざした学習活動においても重視されてきた(木村 2000 : 38)。しかしこれは言い換えれば、自身の経験を記録として「書く」には、一定の力が求められることを意味する。ウーマン・リブの団体が発行したミニコミについて論じた辺輝子は、「実感は、実感のままでは伝達不可能なのであり、反省的に認識されてはじめて、それは伝達を要求し、また可能になる」(辺 1976 : 72)と指摘する。自身の経験を相対的に認識して表現することで、個々の経験が、災害・復興時の「女性の経験」の記録となって可視化され、社会的な課題が共有され得るが、「書く」ことを意識してきた女性でさえも、災害の経験を「書く」には困難を伴ったと述べる(堀 2016 : 14)。日頃、表現することの少なかった女性たちにとって、アンケートの回答や聞き取りへの協力は、「書く」ことの負担を軽減しつつ、それが報告書となって返ることで、自らの声が聞かれたことを実感できる意味を持っていた。もちろん、アンケートや聞き取りが、実施者の聞きたい声だけを聞き取っていないかに注意が必要であろうが、実施者の共感や心を寄せる当事者性が、アンケートや聞き取りの実施、あるいは報告書の発行や報告会等を通じて、回答者の経験の表現のきっかけとなり、エンパワーメント支援の効果をあげたのではないだろうか⁶。

ところで、フェミニスト・アクション・リサーチとは、DVやセクシュアル・ハラスメント等、「個人的なこと」として公的な議題にされなかった課題を可視化するために、女性たちが実践した取組だ。1990年代に始まるこの取組は、調査によって、女性固有の経験や事象を明らかにし、その問題解決をめざすが、調査を実施すること自体やその結果が、人々の意識を動かし、運動や研究の進展、社会制度の改善を起し、それらの相乗効果によって社会変革を促す(原田 2004 : 19)。女性団体が、災害後に被災地の女性を対象に実施したアンケートや聞き取りもまた、フェミニスト・アクション・リサーチだと考えられる。アンケートや聞き取りが災害時に女性が直面する課題を明らかにする記録となり、自身の経験の表現がエンパワーメントのきっかけとなった女性が、その記録に基づき、課題解決や社会変革を促すことが期待できる⁷。

アンケートや聞き取りは、自身の経験や思いを言語化することが難しく、声なき声となってしまうがちな、女性の災害経験を可視化する意義をもった。そしてそれは、次の取組に活かすという目的を超え、災害を経験した女性の自己表現を通じたエンパワーメント支援の意義をもっていた。ただし、潜在化しがちな女性の声を聞き取る手法は、ここで取り上げたアンケートや聞き取りだけではない。写真や手仕事を媒介にして、災害経験を記録する活動も行われており、それらの活動を通じて、女性が経験を語ることで支援される状況がこ

れまでのインタビュー調査から伺える。言語化されない媒体によって、記録の手法が拡張され、女性のエンパワーメントが達成される活動の意義を明らかにすることも重要である。女性たちの災害経験の記録活動は今も続いており、その意義や可能性を広げている。引き続き、女性たちの活動に注目していきたい。

付記：本稿は、科学研究費女性事業基盤研究（c）26360037 及び 17K02068 の成果の一部である。

<注>

- 1 気象庁では新潟県中越地震と命名したが、その後、新潟県が新潟県中越大震災と命名した。本稿では、以下、中越大震災と略す。
- 2 記録活動を含め、災害後の女性団体の活動を支援した代表的な助成金として、阪神淡路大震災後の「元気アップ自立活動支援事業」（兵庫県立女性センター実施）、東日本大震災後の「ジェンダー平等をめざす藤枝滯子基金」（ぐるーぷみこし実施）がある。これらの事業報告（元気アップ自立活動支援事業は初年度分のみ）も貴重な記録誌である。
- 3 自由記述を重視する見方は、阪神・淡路大震災の女性の経験をアンケート調査した Z さんにも共通する。この調査は、講座の修了レポートとして実施され、他の修了生のレポートとともに発行されているため、災害記録誌ではないが「多くの男性（特に、行政関係で働く方）にこの調査の自由記述に示される、働く女性の声を聞いてほしい」との記載がある（伊丹市 1996：139）。筆者が行ったインタビュー調査（2015 年 10 月実施）では、これについて「記述はあまり客観性が無い、表になったり、図になったりする方が有用視される感じがあるけれども（中略）やっぱり、自由記述にこそ出てくるほんとの声」との発言があった。
- 4 筆者が主宰する研究会で、E さんがこの報告書をレポートした際の発言に基づく（2017 年 11 月）。記述の多さについては、被災地に居住する出席者からは、調査時期が早く「回答疲れ」が起きていなかったからではないかとの見方も示された。
- 5 2016 年 1 月、2 月に沿岸の 2 つの市で開催。筆者は助言者としていずれにも同行した。
- 6 中国における日本軍性暴力被害の調査・記録に取り組む石田米子は、聞き取りで体験を語ることを、体験に対する自分の認識や寛恕を解放していく過程で、「可哀想に」という聞き手は解放の過程にかかわれないと指摘する（石田 2009：79）。聞き手の視点については今後の課題としたい。
- 7 ナンシー・フレイザーは、サバルタンの対抗的公共圏が、対抗的な討議を考えだし流布させていく舞台となると論じた（フレイザー 1992=1999：138）。女性の活動が残した記録が、女性が公共の場での討議で活かすことのできる言説となっていく過程については、さらに検討が必要である。稿を改めて検討したい。

【参考文献一覧】

Aoki, reiko, 2018 “Collection Development on Women’s Earthquake Disaster Experiences and Support Activities in Japan.” Presentations from IFLA WLIC 2018（2019 年 3 月 6 日取得、<http://id.nii.ac.jp/1243/00018799/>）

- 浅野富美枝、2012「被災女性による被災女性のための支援記録—はじめに」みやぎの女性
支援を記録する会編『女たちが動く』生活思想社、8-1
- ブルデュー,P,1987=1991『構造と実践』石崎晴己訳、藤原書店
- エンパワーメント 11 わて、2013『東日本大震災における女性の経験に関するアンケート調
査報告書～復興・復幸の実現に向けて～』
- イコールネット仙台、2012『東日本大震災に伴う「震災と女性」に関する調査報告書』
——、2013『東日本大震災に伴う「震災と女性」に関する調査 聞き取り集 40人の女
性たちが語る東日本大震災』
- 原田恵理子、2004「1980年代以降の女性運動とリブ」『女性学』12、新水社、16-25
- 堀久美、2015「震災の経験を記録に残す女性の活動 阪神・淡路大震災以前の記録を中心
に」中里まき子編『無名な書き手のエクリチュール』朝日出版社：75-84
——、2016「震災の経験を記録する女性の活動についての一考察—中越大震災後の長岡
市を事例に一」『現代行動科学会誌』32：8-19
——、2018a『女性』が担った震災支援活動の意義と可能性』『女性学研究』25、145-167
——、2018b「災害に関する女性センターの情報機能についての一考察—兵庫県立女性セ
ンター・イーブンの長期的な取組を事例として—」『現代行動科学会誌』34：1-11
- 辺輝子、1976「ミニコミ・ウーマン・リブの季節—報道されるリブから主張するリブへ」田
村紀雄編『「知らせる権利」の復権 ミニコミの論理』学陽書房：61-73（著者一覧では、
井上輝子（辺輝子はペンネーム））
- 池田恵子、2010「ジェンダ…の視点を取り込んだ災害脆弱性の分析」『静岡大学教育学部
研究報告人文・社会・自然科学篇 60～1-16
——、2012「女性の視点による被災者ニーズの把握」『国際ジェンダー学会誌』10、9-13
- 木村涼子、2000「女性の人権と教育—女性問題学習における主体形成と自己表現」『国立
婦人教育会館研究紀要』4、35-42
- 木下みゆき・堀久美、2016「女性の震災記録をジェンダー視点からの防災政策に活かすに
は—東日本大震災後の情報発信を中心に—」『大阪大谷大学紀要』51：37-51
- 松井克浩、2011『震災・復興の社会学』リベルタ出版
- 新潟県婦人連盟他、1965『新潟地震と私たち』
- 鹿野政直、1989『婦人・女性・おんな—女性史の問い』岩波書店
- スピヴァク,G.C,1999「サバルタン・トーク」吉原ゆかり訳『現代思想 1999年7月号』、80-
100
- 高橋福子、2013「女性の参画」『復興を取り戻す』萩原久美子他編、岩波書店、10-19
- 辻由希、2016「女性たちの支援活動と復興への回復力」五百旗頭真監修 御厨貴編著『大震
災復興過程の政策比較分析』ミネルヴァ書房：177-200
- ウィメンズネット・こうべ、1996『女たちが語る阪神・淡路大震災』